

日本と中国の大学における「第二外国語」の習得の
現状と課題 —アンケート調査に基づいて—

The Current Situation and Problems of the Acquisition of “the
Second Foreign Language” in Japanese and Chinese
Universities: Based on a Questionnaire Survey

王 瑾

兵庫県立大学

WANG JIN

University of Hyogo

Abstract

With the progress of globalization, the world is being diversified. The importance of communication skill by the English language and “English plus one more language” is increasing. There is a deep-rooted belief in Japanese society that it is enough to be able to use only English.

In recent years, quite a few universities have stopped offering the second foreign language as a compulsory subject. However, despite this trend of emphasizing English, the number of students taking second foreign languages has not decreased every year, and the number of students taking the Chinese language in particular has been even increasing. What are the criteria by which students choose a second language, and what significance should a second language education suited to the present age have? This paper investigates the current status of Chinese language education as a second language in Japan by conducting a questionnaire survey of Japanese university students taking Chinese as a second language. We also conducted a similar survey of Chinese university students taking Japanese as their second language.

This paper examines the problems of Chinese language education as a second foreign language in Japan today by comparing and analyzing the differences in the purpose of learning, motivation, and learning methods of the second foreign language among university students in both countries.

1. はじめに

グローバル化の進展にともない、世界はますます多様化している。英語のみならず、いろいろな言

語によるコミュニケーションスキルの重要性が高まっている。近年、中国経済の成長による経済的結びつきや、多くの観光客の来日、特に大型連休などには中国語が日本国内で日常的に耳にする機会の多い身近な外国語になった。そのような状況の中で、中国語に触れてみたいと思う学生が第二外国語として中国語を選択しているのではないかと思う。

文部科学省の「大学入試選抜改革」もいよいよ2020年度から始まる。この大学入試改革の根底には、正しい知識を覚えれば解けるという「知識偏重」の教育を脱却して、知識を活用する力を伸ばそうという考え方があると思われる。とりわけ英語教育には従来の「読む」、「聴く」という技能だけではなく、「書く」、「話す」といったより発信できるような英語力が必要になってくる。そこで英語によるコミュニケーション能力を一層向上させるために、英語で討論したり、プレゼンテーションを行ったりする教育内容、方法の工夫がなされ始めている¹⁾。

第二外国語としての中国語教育は学生にとって大学に入って初めて学ぶ「初修外国語」として一年間のみ学習することとなる。その学習内容は主に発音、語彙、文法とする基礎的な内容のカリキュラムとなっている。日本における英語教育は中学・高校6年間学び、大学入学後も継続して「既習外国語」として学習することとなる。英語と中国語教育はともに外国語教育の範疇にあるものの、前提条件が全く異なっている。言語発信力が求められる今日、英語のみならず、第二外国語としての中国語教育も時代の変化とともに基礎的内容の上に、言語運用に力を入れる学習方法を考える必要があるのではないだろうか。そこで中国語を第二外国語として筆者が担当しているクラスで2018年度から講義に関するアンケート調査を実施した。

中国においても、世界各国と同様にグローバル化と情報化が進んでいる。近年、言語知識よりも言語運用能力を重視し、特に積極的なコミュニケーションの能力を培うための教育内容への転換が求められている(修2018)。そのような状況における中国の学生にも日本の学生と同様のアンケート調査を実施した。それぞれの国の大学生の第二外国語学習の現状及び学生の第二外国語学習に対する学習動機、学習意欲の違いを比較分析した。またそうしたアンケート調査をもとに、第二外国語の中国語学習において発信力が向上できるような効果的な学習方法を探りたく、授業内容に自己評価プレゼンテーションを導入した。初修外国語として語彙力、基礎文法学習中のプレゼンテーションの実施は筆者にとっても学生にとっても初めての試みである。

2. 日本と中国の大学における「第二外国語」の位置づけ

2.1 中国における「第二外国語」としての日本語教育の実態

中国では、グローバル化の進展及び大学教育の大衆化により、日本語教育学習をめぐる状況が近年大きく変化している。日本国際交流基金HPに掲載された「2015年度海外日本語教育機関調査」の結果によると、中国における日本語学習者の数は95万人以上であり、世界一位となっている²⁾。

日本と中国は1972年の日中国交正常化後、両国の関係が緊密化し、日系企業の中国への進出など経済関係の拡大にともない、中国における日本語教育は順調な発展をたどってきた。1990年代半ばまでに日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位を確立した。また、日本政府観光局(JNTO)が発表した2018年の訪日外国人旅行者数(推計値)の中では800万人を超える中国人観光客が日本を訪れ、また中国人の日本への好感度も上がりつつある。このような変化は中国の日本語教育に大変良い社会的な環境

を作り出した。日中間の密接な経済関係により、中国にある日系企業への就職、日本への留学等の実利的なニーズも高い水準が維持されている。文化的な側面においても、日本のアニメ、マンガ、ファッション、ポップカルチャー、観光等、中国の学生にとって日本への興味、関心を強く喚起する要因となっていると考えられる。

中国の大学における教育制度は日本と異なる。とりわけ第二外国語教育に関しては、統一的な教育基準と指針が定められていない(李・任・趙 2012)。第二外国語の位置づけは二つに分類される。一つは外国語専攻つまり外国語学部としての学習内容の中に組み入れ、専攻科目の第一外国語を履修する以外に第二外国語も必修科目として履修しなくてはならない。他方、外国語専攻以外の学部(外国語非専攻)の外国語教育は一般教養科目として第一外国語は必修科目であるが、第二外国語は選択科目となっている。外国語専攻の科目としての第二外国語では選択できる言語は多く、英語、日本語、ドイツ語、ロシア語などがある。一方、外国語専攻以外の学部の科目として選択できる第二外国語の言語は少ない(鄭 2005)。日本の大学で行われている第二外国語の教育は中国では外国語専攻以外の学部の科目としての「第二外国語」と同様である。

2012 年度国際交流基金の日本語教育調査データ³に基づく、中国の大学における第二外国語として日本語を履修する人数は第二外国語総学習者数の 34.6%を占め、若者の日本への関心度が依然として高いことが分かる。今後、第二外国語としての日本語教育の充実がますます必要とされるだろう。

2018 年に中国教育部(日本の文部科学省に相当)は大学教育国家スタンダードを発表した。これを契機に中国の大学における学習指導要領の改訂や教育課程の再編成など一連の教育改革が実施されることになる。21 世紀を生きぬくための教育という世界の大きな流れの中で、コミュニケーション能力の重要性や多文化への理解力が必要とされている。今後、中国における第二外国語教育の学習指導要領の改訂や教育課程の再編成は教育改革の一端となるであろう。

2.2 「大学設置基準の大綱化」以降の日本における第二外国語教育の変遷

1991 年文部省(現在の文部科学省)は大学の設置基準の改正、いわゆる「大学設置基準の大綱化」を公表した(田中 2003)。それまでの「大学設置基準」では「外国語は科目として独立」、「原則として二外国語以上、一外国語でもよい」、「卒業要件は一外国語 8 単位以上」、「二外国語以上の場合には、専門教育科目の単位に含めることが出来る」と『文部省令第 28 号』によって定められていた。しかし、「大学設置基準の大綱化」以降、大学が開設することを義務付けられていた科目区分、一般教育科目、外国語科目などの分類が廃止され、全国の大学にあった一般教育課程や教養部が解体され、専門教育を中心とした学部教育の編成が押し進められた(林 2003)。こうした改革の結果、外国語科目の制度的基盤の喪失とともに、第二外国語教育は不要論にさらされた(三浦 2004)。「二か国語は身につかない」「英語以外は必要ない」、「まず英語を」、という論調が見られるようになった(朝日新聞 2008.5.26)。中国語を履修する学生にとっては、単位を取るということが一番の目的であり、そもそも学生は第二外国語がなぜ必要かという疑問をもっている(張立波 2008)。第二外国語学習へのモチベーションの低さは「大綱化」以降の専門教育の重視によって直接的に職業に役に立つための実用的な能力の習得が出来るまでは難しいからだと思われる(坂野 2011)。そのような第二外国語教育に対し、否定的な意見が多くみられるようになった。

また、第二外国語に対する影響として看過できないのが、2000 年の大学審議会答申「グローバル化

時代に求められる高等教育のあり方について」である。「グローバル化が進展する状況においては、外国語を駆使する能力が不可欠である。とりわけ英語は、現状において国際共通語として最も中心的な役割を果たしており、英語力はグローバルな知識や情報を吸収、発信し、対話、討論するための基本的な能力である」⁴との記述がある。ここで言われている「グローバル化」とは、すなわち英語教育の充実に他ならない。文部科学省の 2002 年に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』及び 2003 年の『英語が使える日本人』の育成のための行動計画といった施策も英語を重視する傾向に変わらなかった。2010 年、文部科学省が「外国語能力の向上に関する検討会」を立ち上げ、ここでようやく、英語以外の外国語能力の向上について検討が開始された。グローバル的な人材を育成するために第二外国語の必要性とその能力育成が重要であると認識されはじめた。

2013 年に小学校における英語教育の拡充強化、グローバル化に対応した英語教育改革計画の実施計画が発表された。特筆すべきは、2015 年に文部科学省教育課程企画特別第 9 部会で、新しい学習指導要領に英語以外の外国語、第二外国語の重要性が再認識されたことである。しかし、英語と第二外国語はともに外国語教育の範疇にあるものの、大学進学後、履修を義務付けられている外国語科目は英語である。それに対し、第二外国語は複数の選択肢の中から自らの意思で選択することが可能である。また、第二外国語の場合はたとえその外国語科目の単位を修得できなくても、改めて別の外国語科目を履修しなおすことが可能なこともある。

2.3 日本における第二外国語としての中国語教育

世界から中国が注視される中、海外で中国語を学ぶ人口は約 4,000 万人に達していると言われている。欧米での中国語学習者も急増し、全米では、中国語科目を設置する公立・私立の学校が 10 年前の 200 校から 1600 校に激増し、今もなお増加の勢いは止まらない。また、日本国内でも中国語の学習人口も 200 万人を突破したとも言われている⁵。

日本における第二外国語としての中国語教育の教育指針について、本稿では中国語能力の評価指標としての中国語検定試験を用いて考えてみたい。中国語の能力評価指標は一般財団法人日本中国語検定協会が実施する中国語検定試験がある。また、HSK (漢語水平考試) がある。HSK は中国の文科省いわゆる中国の政府教育部が認定する世界中どこでも平等に評価される世界共通基準で作られた中国語検定である。英語の TOEIC 公開テストなどと同様である。10 年先を見越した中国語人材の育成と中国への留学や就職の際に大変有利などと言う理由で、日本における HSK 受験者数は年々増加し、2018 年度 34000 人を突破している⁶。

中国語検定試験には準 4 級から 1 級までである。日本では中国語が必要でない一般企業なら 3 級を取得していれば就職に有利であると言われ、大学の第二外国語における第一年度履修程度の合格基準が 4 級に位置付けられた⁷。HSK では、初級から上級までのレベルを合わせ全部で 1～6 級がある。週に 2～3 時間の中国語学習を半年から 1 年程度行った学習者は 300 語彙程度の常用単語と文法知識を習得している。これらの者は初級レベルであり、大学の第二外国語における一年間履修程度の学習内容は HSK2 級に相当するものと位置づけられた⁸。検定試験を強く推奨したりしてはいないが、筆者の担当クラスに HSK3 級を受けた学生がいる。また 1 割の学生が中国語検定を受ける予定があるとのアンケートの回答もあった。英語では就職のために TOEIC 公開テストなど受けている学生が多い。中国語を学び、中国語の検定資格を持って就職活動に少しでも有利にと考えている学生も増えつつある。

大学における第二外国語学習の意義について、長年「教養」か「実用」か、繰り返し議論されてきた(三浦2004)、(黒田2000)。外国語を学ぶことは新たな世界観、価値観、加えて異文化に触れるという教養を培うためであるのか、または、学んだ言語を道具として実用的に使用することが重要であるのか、という議論である。中国語学習に関しては、年間講義時間が少ないため、中国文化に触れることが出来る教養として重視される傾向が見られる。三須は年間30コマの授業では、実際の語学力は見込めないため、この短い時間を中国語に少しでも親しませ、中国の文化に関心を持たせるための契機として有効的だろう(三須2014)。また、張は学習時間数の制限により、教養教育に着目し、発音、基本文型、文法及び語彙など基礎的内容を身につける事が重要である(張軼欧2013)。筆者は初修中国語の学習においては「実用」と「教養」は切り離してはならないし、単純にどちらか一方を目的化することはできないと考えている。

学生にとって大学で初めて出会う第二外国語、その学習目的、また学生が何を中心に学びたいのか明確にする必要があると考える。

3. 日本と中国の大学における「第二外国語」の習得の現状と課題 —アンケート調査に基づいて—

日本と中国の大学ではいろいろ制度的など異なる点があるため、単純に比較することが難しいが、第二外国語としての中国語を履修する日本の大学生と第二外国語として日本語を履修する中国の大学生を対象にアンケート調査を実施した。日本の学生は2018年度の前期、後期、そして、2019年度の前期にそれぞれアンケート調査を行った。一方、同様の内容の中国語のアンケート調査票を作成し、中国の大学生に2018年7月後期終了時(中国の場合は9月が新学期で、7月は後期終了時)に実施した。

日本の大学における第二外国語を履修する言語は言語別に見ると中国語が最も多い(文部科学省2011)。2018年度兵庫県立大学姫路工学キャンパスの一年次の「第二外国語」を登録した履修者は761人、その中で中国語の履修者登録数は441人、第二外国語登録者数全体の半数以上を占め、最多である。「第二外国語」として中国語は週に1コマ、年間30回の学習時間が設定されている。本アンケート調査の対象者：

①2018年度中国語を履修した兵庫県立大学工学部キャンパスの一回生工学部34人、理学部37人計71人を対象に前期と後期、二回実施した。

②日本語を履修した中国山西大学商務学院100人及び中国山西财经大学98人計198人を対象に後期に一回実施した。

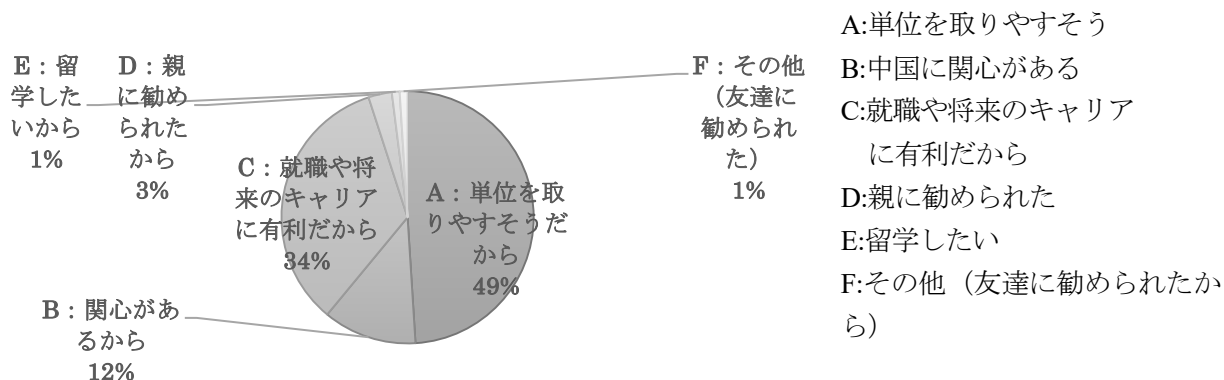
③2019年度中国語を履修した兵庫県立大学工学部キャンパス一回生工学部35人、理学部40人を対象に前期に実施した。

3.1 設問：「中国語」または「日本語」を履修する理由は何か

3.1.1 日本の大学生が中国語を履修した理由(2018年度前期)

中国語をゼロからスタートし、前期15回講義を終えた学生への調査結果は「単位を取りやすそうだから」が49%を占め、最も多かった。「就職や将来のキャリアに有利だから」が34%で二番目に多く

占める。中国に対する関心は僅か12%にとどまった。

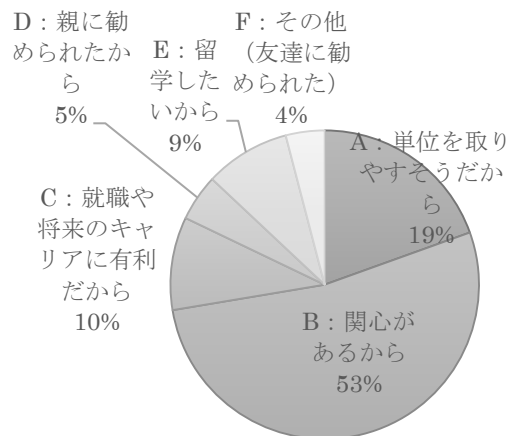


3.1.2 中国の大学生が日本語を履修した理由 (2018年度)

同じ内容で中国の大学生が日本語を選択した理由は、最も多かったのは「日本に関心があるから」で53%を占める。「単位を取りやすそうだから」が19%であり、「就職や将来のキャリアに有利だから」が10%であった。

ここで注目しなければならないのが両国の大学生のお互いの国への関心度の温度差である。

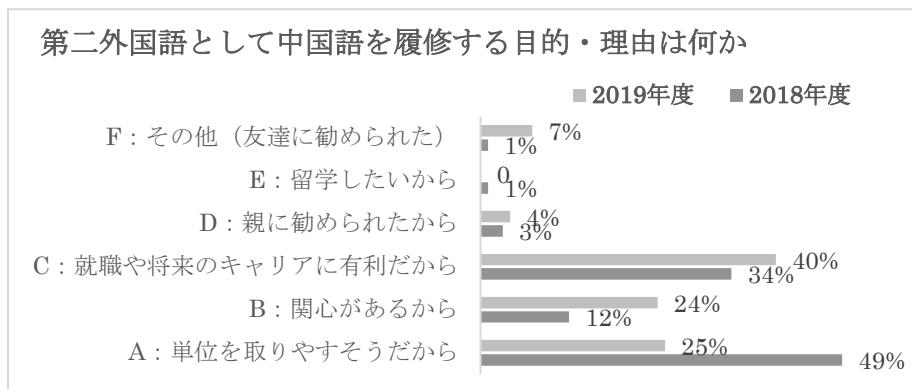
日本の民間団体「言論 NPO」と中国国際出版集団が2018年9月、日中両国の2500人以上を対象に実施した共同世論調査⁹によると、中国人の日本に対する印象が全般的に改善したことが分かった。このうち「相手国に対する印象」の質問項目では、「良い」(「どちらかと言えば良い」を含む)と答えた中国人の比率が全体の42.2%と前年(31.5%)比10ポイント以上改善し、調査開始から初めて4割を超えた。中国側の日本に対する印象が改善された背景としては、①日中平和友好条約40周年を迎え、関係改善・協力の本格化、②来日観光客の増加等による直接交流の増加、③若者層を中心とした情報源の多様化などが挙げられる。他方、日本人の中国に対する印象は依然改善が進まず、対照的な傾向が鮮明化している。本調査では両国関係の現状に対する悲観的な見方は大きく減少したものの、日本の86.3%と9割近くが中国の印象を「悪い」とし、前年88.3%と比べてほとんど改善が見られないような調査結果であった。日本の学生の中国への関心度の低さは日本人が持つ中国に対するイメージと関連しているかどうかははっきりしないが、中国の学生は日本に対し好感を持ち、以前より関心を持つ人が増えていることが分かった。



3.1.3 日本の学生が中国語を履修した理由 (2018年度前期と2019年度前期)の比較

中国語を履修した日本の学生に2018年度前期の調査と同様に2019年度の前期もアンケート調査を実施した。2019年度の調査結果に変化が見られた。

比較分析した結果は、2018年度の履修理由がもっとも多かった「単位を取りやすそうだから」は49%であったが、2019年度は25%であった。2019年度の履修目的で最も多く示されたのは「就職や将来のキャリアに有利だから」が40%

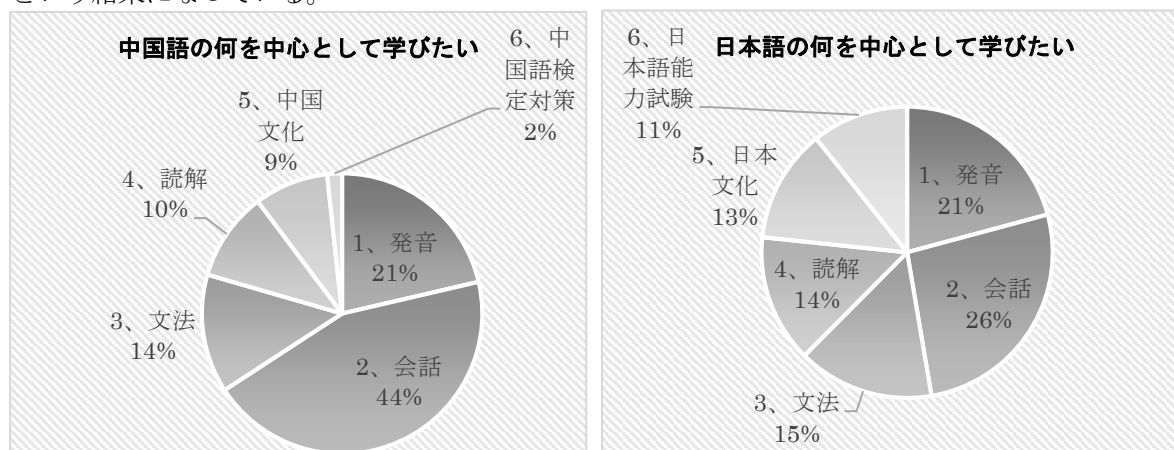


であり、2018年度より6ポイントアップした。「中国に関心があるから」が2018年度の12%から2019年度は24%に上がった。中国に関心を持たない学生が依然として多いが、わずかながら、関心を持つ学生が増えた結果となった。今後も継続的に見ていく必要がある。

3.2 設問：日本と中国の大学生は何を中心として学びたいか (2018年度)

学生たちが何を中心に学習したいのか、またはどのような学び方をすれば、学生のモチベーションを向上させ、学習効果を上げることができるのか、この設問の調査を行った。それに対する回答をまとめると次のような結果になった。

日本の大学生は「会話」をしたいとの回答者が最も多く44%を占める。「発音を中心として勉強したい」のは21%で、「文法を学びたい」の回答が14%である。「読解」、「中国文化」などが10%以下という結果になっている。



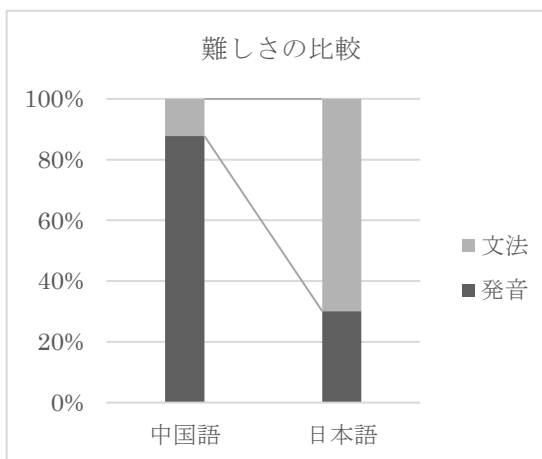
中国の大学生も日本の大学生と同様に「会話したい」との回答がもっとも多く26%を占める。「発音」が21%で、次に「文法」、「読解」、「日本文化を学びたい」、いずれも10%強である。「日本語能力検定試験を受けたい」学生が11%を占める。一方日本の学生は「中国語検定試験を受けたい」のがわずか2%だったが、2019年度後期終了時に再調査した時には、HSKを受験した学生が1名、今後、受験の予定があるものも数名がいる。少しでも就職に有利だと考え、受験したいと考える学生が増えている。

外国語はコミュニケーション能力を養成するために話す力が欠かせない。話す力をつけなければならぬと実感している両国の大学生の認識は同じである。

3.3 設問：それぞれ言語に感じた難しさと面白さの比較

3.3.1 授業に感じた難しさ

日本と中国の学生が授業に感じた中国語と日本語の難しさを比較した。日本の学生は中国語の授業に文法より発音を8割以上の学生が難しく感じている。中国語の発音の表記はローマ字を用いて、その上に声調符号をつけて、発音することになっている。漢字の書き方以前にこういった発音つまりピンインを覚えなさいといけぬ。学生のアンケートに「中国語の文法は英語と比べると簡単だけど、発音が難しく、特に鼻母音が難しい」、「声調が難しく、特に第三声が難しい」と書かれたように中国語の発音が苦手な学生は多い。また、ピンインがローマ字表記なので、安易に英語のように発音したりする学生もいる。

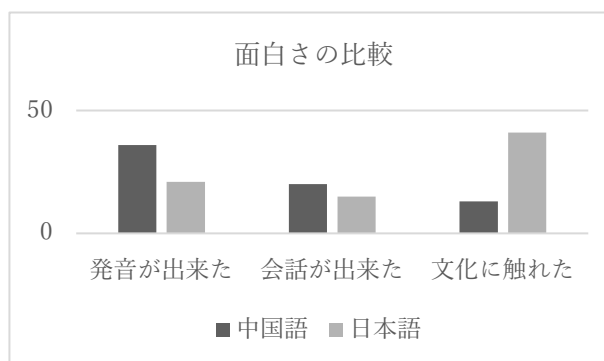


文法に関しては、中国語は英語のように文中に置かれる位置によって代名詞の形が変わることもないし、主語の人称によって動詞が活用することもないので、初級段階の中国語学習者にとっては、文法はさほど難しく感じないだろう。

一方、中国の学生は日本語の発音より文法がより難しく感じる。日本語は述語と目的語が中国語と反対である。動詞の変化も活用があるから日本語学習者にとっては難しく感じられる。

3.3.2 授業に感じた面白さ

お互いの言語の面白さに関して、まとめた表を見てみると、日本の学生にとっては初級段階の中国語の発音を大変難しく感じる (3.3.1 が示されたように) 一方、授業で発音が出来た喜びは中国語学習の面白さにもつながっている。中国の学生は日本語の勉強を通して、日本文化に触れたことに日本語の面白さを感じたようである。



3.3.1 の授業に感じた難しさと 3.3.2 の面白さの設問は 2019 年度前期にも調査し、2018 年度とほぼ同様な傾向が見られたので、ここでは再度比較する事を省略した。

4. プレゼンテーションの試み

2018 年度前期のアンケートでは学生が中国に対してあまり関心がなかった。また中国語を選択した理由は単位を取りやすそうだからといった学習意欲が低いことがうかがえる。一方、「中国語の発音が難しい」、しかし「話す力をつけたい」との回答もあった。筆者は学習者の中国語を学ぶモチベーションを上げ、さらに学習効果を上げるための教育方法を考える必要があると考えた。そこで後期講義に一つの改善策として、自己評価プレゼンテーションを導入してみた。学習時間が短く、基礎文法しか分からない。語彙力も大変少ない中で、初めて学生に中国語で文章を書かせた。提出された文章を添削した後に発音の練習をさせた。実施した後の後期終了時に、再度アンケート調査を行い、前期と後期における学習効果に変化があったかどうかを検証してみた。

4.1 2018 年度後期のプレゼンテーションの実施

実施方法：

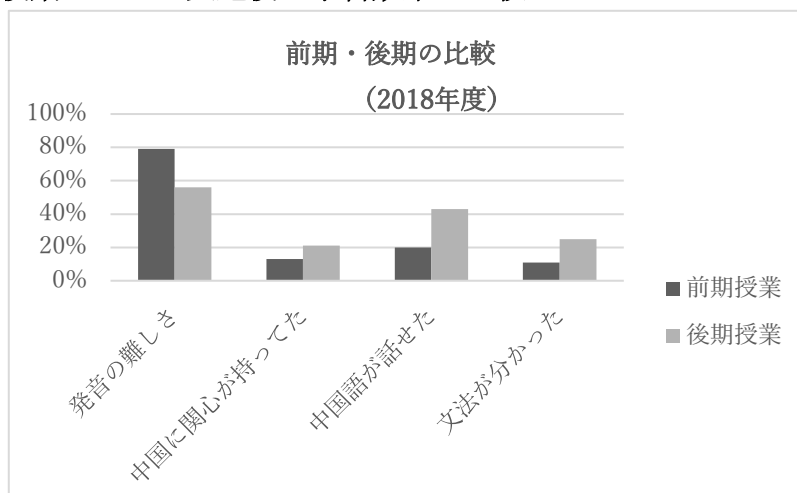
- 1) 実施時間は後期中間審査期間中に行う。プレゼンテーションの時間は 2 分以内。授業時間を利用して、グループに分けて行う。
- 2) プレゼンのテーマとして、後期教材の内容に併せて、学生が比較的取り組みやすいテーマにした。今回のテーマは「私が好きな○○」(我喜欢○○)とした。事前に中国語の原稿を作成し、それに基づき、プレゼンテーションを行う。原稿の添削はメールでチェックした。
- 3) プレゼンテーションの評価としては、五段階の評価チェック項目表を作成した。事前に評価チェック項目表を学生に配布した。学生全員が評価に参加した。毎回発表者から最も良かった一人を学生たちの評価により選ぶ。全員の発表が終了後、選ばれた優秀者が再びスピーチし、最優秀者を決定する。内気で話すことが苦手な学生もいれば、堂々とした発表をする者もいた。学習目的はお互いに刺激し合い、クラス全体の学習モチベーションを上げる事が狙いであった。

- 4) 評価チェック項目表は四項目を設定し、五段階で評価する。四項目というのは発音、流暢さ、表現力(初級段階なので、分かりやすさを重視する)及び発表内容となっている。評価の配点は全部で 20 点。一つの項目の評価は 5 点満点に配点し、減点法で評価する。発表者の話す技能を高めるためのコミュニケーションな授業の工夫であるが、発表者以外の学習者にとっては聞く技能の向上に役立つと考えた。

中国語後期中間課題「私の好きな○○を紹介」(我喜欢○○)				
チェック項目 五段階	発音	流暢さ	内容	表現力 (分かりやすさ)
5	声調、発音を守り、正確に言えた	中国語の抑揚を留意し、流暢に言えた	起承転結がはっきりして、何が好きかよく説明ができた	分かりやすくて個性あふれる工夫があった
4	声調、発音の間違えが三ヶ所以内	流暢に言えたが、つまずきがあった	好きなものがどうして好きか説明ができた	自分の好きなものの事を伝えることが出来た
3	声調、発音の間違えが五ヶ所あった	途切れが少しあった	好きだというだけでその理由が伝えきれなかった	好きだというが、うまく伝えることが出来なかった
2	声調、発音の間違えが五ヶ所以上	途切れが多かった	内容はあるものの、好きな理由が伝わってこなかった	何が好きなのか、どう好きなのか伝わってこなかった
1	発音が全くできていない	最後まで言えなかった	何を言いたいのかわからない	何が好きか全くわからなかった

4.2 2018年度の前期講義と後期プレゼン実施後の学習効果の比較

学習効果がアップしたかどうか、前期と後期を比較分析した結果は次のグラフをまとめた。発音の難しさが後期授業を通して改善されたことが分かった。また中国への関心も、中国語が話せたことも、文法が分かったことも後期にいずれも向上し、一定の学習効果が見られた。特に原稿のチェックをメールで行ったので、中国語の文字入力に関して、予想外の効果があった。



日本語の文字入力はローマ字入力が一般的である。中国語はピンイン入力で、漢字変換にするのが普通である。初級段階の学習者にとっては正確なピンイン入力ができないと漢字の変換が出来ない。今回のプレゼンテーションの原稿作成中、9割の学生が中国語のピンイン入力できた。それによって正確なピンインを身につけ、発音の勉強に大変有効的であることが確認できた。

4.3 2019年度前期のプレゼンテーションの実施

2018年度の後期にプレゼンテーションを実施した後、中国語の四技能（聞く、話す、読む、書く）ともに実力の向上や難しい発音の改善が見られた。今まで前期講義では主に発音の勉強を中心としていた。後期授業と同様にプレゼンテーションを取り入れたら、同じ学習効果が見られるのか、2019年度の前期にもプレゼンテーションを実施し、検証してみた。

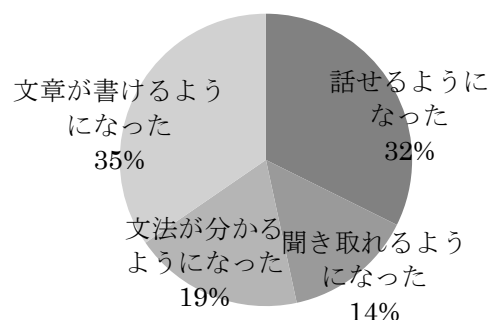
2019年度の前期講義に「自己紹介」（自我介绍）をテーマにプレゼンテーションを実施した。2018年度後期と同様なアンケート調査を実施した。調査の結果を見ると、9割の学生が実施してよかったという回答が出たものの、2018年度の後期と比較すると、四技能ともに実力アップにつながる効果までは見られなかった。その理由としては中国語の発音は初心者にとっては大変難しい。声調、発音が正しく出来るまでの勉強時間の不足が一つの原因であると考えられる。自己評価チェック項目表については、チェック項目表は分かりやすく点数はつけやすかったと回答したが、自己評価の点数を付けにくかったとの回答もあった。その理由は学生が「知らない単語があったため、声調が正しいかどうかの判断が難しい」、「自分もできているか分からないので、人の発音を評価するのに難しかった」、「聞きとれるが、全体的に理解するのが難しい」という回答であった。前期講義のプレゼンテーションの導入は発音の練習のためには多少効果が見られるものの、学習向上のためには効果がないように思われる。

5. 結びに代えて

本稿では第二外国語を選択する中国の学生と日本の学生に対して、履修の現状のアンケート調査を

実施した。その結果を比較分析し、それぞれの言語学習の難易さ、学生への学習の動機付け、学習意義、学習意欲について考察してきた。第二外国語としての中国語の学習効果を向上させることを目的とするプレゼンテーションについても考察した。初修外国語には四技能（聞く、話す、読む、書く）を講義に取り入れることが難しいと言われている。本研究ではプレゼンテーションという学習方法を初級段階の学習に導入してみた。「プレゼンを通して、中国語の実力は向上できたか」という

プレゼンを通して、中国語の実力は向上出来たか
(2018年度)



アンケート結果のグラフを見ると、四技能ともに一定の実力の向上が見られた。また学生から「プレゼンを取り入れたのはとても良かったと思う。ただ読み書きだけでなく、実際に話して使うことにより意欲的に取り組めた」、「プレゼンは発音のためだけではなく、書く力も身につくし、良かった」などの感想があった。後期授業に関しては今後の授業運営に参考になる。一方、2019年度の前期調査の分析によると、前期授業においては、学習時間が短く、学生の発音がまだ出来ていない状況の中では、自己評価させるのには難しいという結果となった。今後前期の学習目標の設定に合うような学習方法を考える必要があると思う。

学生の履修目的及び理由に関しては、2018年度と2019年度は少し変化が見られた。今後も注視すべきであろう。一方、本アンケート調査では、中国語を履修しても、中国に関心を持たない学生が少なくない。中国語を学ぶことは学生にとって中国文化への入り口として大きな意味を持っている。今後、言語表現に関わるテーマとして、中国の文化や習慣、より身近な話題を取り上げ、中国に関わるようなプレゼンを考えるようにしたい。

日本における第二外国語教育の位置づけとしては、今までの「不要論」や「実用」か「教養」か、また英語偏重による第二外国語を軽視という状況から変化しつつあると思う。社会や学生のニーズにより、今後またさらに変化するであろう。今回、中国の大学生による第二外国語の履修状況の調査中、日本における第二外国語の教育制度が中国で大変評価され、今後大学の教育改革を迫れる中国に於いては大変参考に値するところが多い(李戦軍等 2012)との論考もあった。

筆者の実践した自己評価プレゼンテーションの授業展開は、初修中国語の学生にとって自己学習意欲を引き出すための実践例として、有効的な学習方法及びその学習効果の一つとして論じる価値があるだろう。今後学生のそれぞれの学習到達目標を踏まえ、更なる研究を続け、第二外国語として役に立つ中国語教育を確立したいと考える。

引用文献

- 黒田龍之助 (2000) 『外国語の水曜日——学習法としての言語学入門』東京: 現代書館
修剛 (2018) 「新時代中国专业日语教育的转型与发展」『日语学习与研究』 194, 75-79

- 田中慎也 (2003) 「大学「外国語教育」と「大学外国語」教育」『桜美林大学産業研究所 産研通信』NO56, 23-25
- 張軼欧 (1994) 「第二外国語としての中国語の初級教育における問題と対策」『外国語教育フォーラム』第 6 号, 69-82
- 張立波 (2008) 「大学の第二外国語教育課程としての初習中国語教授法に関する試み——相原 茂等著『一年のころ』第六課を中心に——」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』3, 301-306
- 鄭社養 (2005) 「大学第二外国語教学的現状及び改革策略」『改革与戦略』月刊誌 2005 年 7 月号, 62-63
- 林正人 (2003) 「大学設置基準大綱後の共通 (教養) 教育の抱える問題」『大阪工業大学紀要 人文社会篇』第 48 卷, 第 2 号, 13-26
- 坂野鉄也 (2011) 「第二外国語教育の「新しい発想」」『滋賀大学経済学部 Working Paper』No. 146, 1-14
- 三浦淳 (2004) 「第二外国語教育を壊滅から救い、新たな制度とイデオロギーを生み出すために」『人文学部研究』114, 75-96
- 三須祐介 (2004) 「第二外国語としての中国語教育」『広島経済大学研究論集』第 27 卷, 3 号, 55-66
- 李運博・修剛 (2019) 「新時代に向かう中国日本語教育の現状と課題」『早稲田日本語教育学』第 24 号, 49-57
- 李战軍・任鋒・赵国齐 (2012) 「日本大学公共第二外国語教育現状及我国大学公共外国語教育的啓示」『保定学院学報』第 25 卷, 第 4 期, 117-120

注

- ¹ 文部科学省、「平成 30 年改訂の高等学校学習指導要領に関する Q&A」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/1422433.htm)、問 2 の改訂後の新設される科目を参照。
- ² 日本国際交流基金 HP (<https://www.jpff.go.jp>)、「2015 年度世界中の日本語教育機関調査」による調査報告である。日本国際交流基金では HP にて全世界の日本語教育についての情報、教育制度と外国語教育、教科書、教師などの項目について、1 年に 1 度掲載内容の更新を行っている。
- ³ 日本国際交流基金 HP (<https://www.jpff.go.jp>)、「2012 年度世界中の日本語教育機関調査」による調査報告である。
- ⁴ 文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1343704.htm) 参照。
- ⁵ <http://www.hskj.jp/about/business/> を参照。
- ⁶ HSK (日本で一番受けられている中国語検定) HP (<http://www.hskj.jp/>) を参照。
- ⁷ 一般財団法人日本中国語検定協会 HP (<http://www.chuken.gr.jp>) を参照。
- ⁸ HSK (日本で一番受けられている中国語検定) HP (<http://www.hskj.jp/>) を参照。
- ⁹ 「日中世論調査」(2018) による調査報告である。日本の民間団体「言論 NPO」と中国国際出版集団が 2018 年 HP にて発表された。